音楽の力

青柳いづみこ
（ピアニスト・文筆家）

フランスの作曲家、クロード・ドビュッシーの演奏・研究で知られる青柳いづみこさん。ドビュッシーの生誕150年でもあった昨年、CDアルバム『ドビュッシーの神秘』をリリースするなど、音楽家としての顔に加え、日本エッセイスト・クラブ賞をはじめとする多くの文学賞にかがやく文筆家としての顔もお持ちです。

そんな青柳さんに書き綴っていただいた今回のテーマは「音楽の力」。癒し、喜び、感動などをもたらす音楽、その本質にせまるお話は、音楽を学ぶ我々に大いなる示唆を与えてくれます。

青柳いづみこ *Izumiko Aoyagi*

安川加壽子、ピエール・バルビゼの両氏に師事。東京藝術大学大学院博士課程修了。1990年、文化庁芸術祭賞受賞。演奏と執筆を両立させる希有な存在として注目を集め、9枚のCDが『レコード芸術』誌で特選盤に選ばれるほか、『翼のはえた指　評伝安川加壽子』で吉田秀和賞、『青柳瑞穂の生涯』で日本エッセイスト・クラブ賞、『六本指のゴルトベルク』で講談社エッセイ賞、CD『ロマンティック・ドビュッシー』でミュージック・ペンクラブ賞受賞。'12年にはドビュッシー生誕150年記念として「文学キャバレ『黒猫』の仲間たちとドビュッシー」を開催、大きな話題を呼んだ。近刊は『ドビュッシーとの散歩』（中央公論新社）とCD『ドビュッシーの神秘』（カメラータ）。日本ショパン協会理事、大阪音楽大学教授、神戸女学院大学講師。HP：http://ondine-i.net

特別養護老人ホームにて

これから社会に巣立つ学生さんに私は、どんな形でも聴き手のために弾いてほしい、どんな活動の形でも音楽を通じて社会の役に立つことを大切に考えてほしいと言っている。

そんなふうに考えるようになったきっかけは、亡き母が入所していた特別養護老人ホームで開いたボランティアのコンサートである。

母は80歳も半ばにさしかかったころから認知症の症状をあらわしはじめ、7年間は自宅介護でがんばったが、私も主人も仕事があり、娘は学生で日常介護ができない。声をかけてくださる施設があって入所に踏み切った。

手厚い介護で表情もやわらぎ、改めてプロの仕事の尊さを思った。

入所者が集って思い思いの娯楽を楽しむスペースにはピアノもあり、それを見た私は、是非ピアノを弾かせてくださいとお願いした。古い縦型のピアノで調律もしていないのに…と施設の方はしきりに恐縮されていたが、そんなことはあまり気にならなかった。

コンサート当日は、ピアノのまわりをパイプ椅子や車椅子で半円状に囲んでいただいて、お一人お一人に弾いているところが見えやすいように工夫した。入所者の方々は、いつもよりちょっとおしゃれをして集まってくださった。

母は最前列に座り、白い髪飾りを

▲ 本学入間キャンパス

つけてとてもかわいらしかった。

お年寄りが親しみやすい曲目をと考えて、ショパン『小犬のワルツ』やシューマン『トロイメライ』などを弾いたあと、『荒城の月』や『浜辺の歌』『赤とんぼ』などをピアノ用に編曲したものを演奏させていただいたところ、びっくり。客席から歌声が沸き起こったのである。だって、日常生活では自分の名前も忘れてしまったり、お話ができなかったり、声も出なかったりする方々なのである。でも、歌になると音程は確かだし、歌詞だってちゃんとおぼえている。

あらためて、音楽の力を思い知らされた。

モーツァルトの癒し力

こんな話もある。月に1回、都内で開いているフランス音楽のセミナーに、あるピアニストの方が受講にみえた。その方は、クモ膜下出血で一時は右半身不随を宣告され、リハビリの過程でずっと音楽を聴いているうちにみるみる回復されたとのこと。

チューブで身体中を固定されて過ごしたICUの日々、iPodで聴く音楽だけが救いだったという。といっても、効果が上がる音楽と上がらない音楽があったらしい。

演奏活動をしていたころはリストを好んで弾いていたのに、なぜか聴いても安らぎを得られない。ところが、モーツァルトはすっとなじみ、自分の身体が音楽で満たされるような不思議な感覚を味わった。

それまで、音楽は自分の外にあるものだったが、そのとき初めて、自己の内部に音楽を感じたという。

リハビリに励んだ結果、何とか半身不随はまぬがれ、退院して演奏を再開した。なかなか元のように指は動かないが、病気をきっかけに音楽への対し方が大きく変わった。今までは、ミスをしてはならないとか、大きな音を出そうとか、いろいろなことにとらわれていたが、今は、自分の気持ちをそのまま音に託すことが一番大事だと思うようになった。

こちらも、音楽の力を思い知らされるエピソードである。

▲ 学生を指導中の青柳さん

音楽を通して何を伝えるか

音大のレッスン、コンクールやオーディションで若い方のピアノを聴くたびに、音楽がその人の外にあると感じることが多い。

きちんとは弾いているが、その人が楽譜から何を読み取り、読み取ったことをどんな方法で聴き手に伝えたいと思っているかが見えてこないのである。音楽とは、楽器からひき出す音を通じて作曲家の気持ちや考え、弾き手の気持ちや考えを相手に伝えることだという、一番のポイントがおろそかにされているように思えてならない。ピアノはあまりにも音が多すぎて、すべての音を間違いなく弾くことが最重要課題になってしまっている。

まず、一音でもいいから、自分でもうっとりするような美しい音を出して、その響きに耳を傾けてほしい、と願う。その音はどんな音なのか。喜んでいる音か、悲しんでいる音か、怒っている音か、やさしい音か。自分の音をよく聴くことによって、次にどうつないで行くか、フレージングの問題に気づくだろう。

このフレーズは、どこに向かっているのか。このフレーズ全体で、作曲家はいったい何を表現したいのか。このフレーズは、全体から見てどんな位置にあるのか。

自分なりに考えた上で、それではこの音はどんなふうに鳴らしたら目的にあった音が出せるのか、このフレーズはどんな種類のレガートで弾けば、ふさわしい表現ができるのかという、テクニック的な問題が浮上する。

▲ 武蔵ホールでのトークコンサート

楽譜の深い読みと自分自身の感性に根ざした音やレガートなら、目的がはっきりしているから探すこともできる。偉いピアニストの演奏を参考にすることもできるし、師事する先生や尊敬する先輩に尋ねることもできる。そして試行錯誤をくりかえすうちに、少しずつ、自分がめざす演奏を実現させるための本物の技術が身についていくだろう。

これが練習するということ

もうずいぶん昔のことになるが、非常勤で勤務していた藝大附属高校で、ロシア人ピアノ教師の公開講座が開かれた。とても成績のよい生徒がむずかしい曲を弾いたが、そのピアノ教師は、その楽曲をレッスンするかわりにこう言った。

あなたは音も奏法も解釈も、すべてが硬直しています。あなたの中にあるもの、あなたの本当の気持ちを伝える状況にはありません。あなたはまず、メンデルスゾーンの『無言歌』のような作品を心をこめて美しく弾くことから始めないといけません。このことについて、私はあなたの先生と話しあいたいと思います。

こう言ってその教師は会場を見渡したが、その生徒の先生は聴きに来ていなかった。

私自身にも、苦い思い出がある。

留学中に、スイスのあるシャレーで開かれていたジェルギー・セボックの夏期講習会を受講したときのこと。リストの『マゼッパ』を用意していたが、セボックはレッスンしてくれなかった。かわりに、もう少し音の少ない曲は持ってきていないかときかれたので、シューマン『子供の情景』を弾いたところ、第1曲だけで1時間かかった。

旋律にはカーヴがある、とセボックに言われた。そのカーヴをどうやって出すか、ピアノの音はひとつひとつとぎれてしまうのに、あたかもなめらかにつづいて美しいカーヴを描いているような錯覚を起こさせるためには何をしなければならないか。

旋律はバスに支えられている。バスはどんな進行をしているか、旋律に流れを与えるバスはどんな弾き方をしなければならないか。

旋律とバスの間にはハーモニーがある。この曲の場合は分散和音の形をとっているが、音は離れていても、全体としてハーモニーが聴こえてこなければならない。そのためにはどんな弾き方をしなければならないか。旋律を豊かにし、でも旋律にかぶらないためにはどのようなタッチを選びとらなければならないか。

楽曲には一定のリズムがあり、拍と拍の間は絶えずゆれている。律動と旋律の折り合いはどのようにしてつけなければならないか。ほんの少しの間合いの出し入れによって、旋律のカーヴがよりふくらんで聴こえるような工夫をしてほしい。

こうして各要素に分けながら、パート練習をさせられた。何度もダメ出しをされたあげくすべての要素を合わせたとき、何とこの単純な曲が立体的に浮かび上がったことか。

レッスンが終ったとき、セボックは「これが練習するということなんですよ」と言い、私にはその意味が――今ごろになって――よくわかる。

感動に至る道はさまざま

専門的な教育を受け、むずかしい楽曲を弾きこなす学生に向かって、演奏は、たとえ一本指でも聴く人を感動させればよいのだ、と説いてもとまどいをおぼえるかもしれない。

もちろん、たぐい稀な素質を持ち、豊かな音楽性と見事な技巧で世界各地の聴衆に感動を与える超一流のピアニストであることはすばらしいことだ。しかし、そうでなければ音楽する資格がないとは思わないでほしい。

感動への道はひとつではないのである。

演奏の形態にもさまざまなものがある。ひとたび社会に出れば、ときには『小犬のワルツ』や『トロイメライ』のような、一般的には「容易」とされている曲目を求められることもあるし、クラシックではなく、ポピュラー音楽やアニメの音楽を演奏しなければならないこともあるだろう。

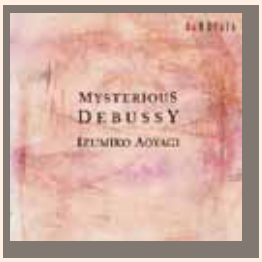
それこそ得難い機会だと思うのだ。もしあなたの弾く楽曲やあなたのピアノが聴き手を喜ばせていることがわかったら、聴き手の身体が動き、表情が明るく変化する瞬間を体験すれば、それが糧となってあなた自身を育んで行くだろう。

そうした現場での貴重な体験を積み重ねることによって、専門的なむずかしい楽曲を弾くときも、人の心に届く音を出すこと、人を感動させるフレーズをつくることの大切さがわかり、あなたの練習や活動に目的が生まれるだろう。

音楽は言葉のように概念を固定する力を持たないが、そのぶん、言葉よりずっと直接的に人の心に働きかけ、さまざまな感情をひき起こす。音楽は、もしそれが本当に弾き手の内部から押し出されたものであるなら、作曲家の魂と弾き手の魂が高度に共鳴したものであるなら、アラビアンナイトの物語のように、人の心の扉に向かって「開け、ゴマ！」と呼びかけることができる。

それが音楽の力だと信じている。

近刊のご著書
『ドビュッシーとの散歩』



昨年発売されたCD
『ドビュッシーの神秘』